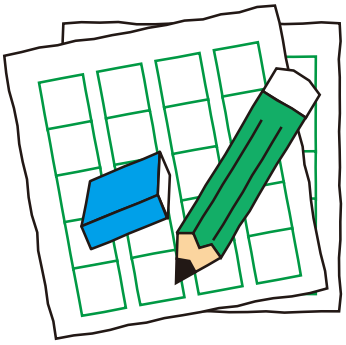
平成23年度福祉体験作文コンクール優秀作品

愛知県社会福祉協議会の主催により、福祉活動やボランティア活動について児童・生徒から640編の福祉体験作文がよせられ、その結果、県内で25の優秀作品が選ばれました。一宮市からも今伊勢小学校3年の早川怜寿さん、朝日西小学校4年の可知英里香さん、大和南小学校6年の加藤小晴さんの作品が入選されましたので、その中から一編ご紹介します。（平成23年度の学年です。）



「いい気分」

一宮市立今伊勢小学校3年
早川怜寿（れいじ）

ぼくは、夏休みがはじまったばかりのある日、ふわふわしてうれしくて、しあわせな気分になりました。

夕方、お母さんといっしょに、夕ごはんのざいりょうを買いに、カネスエに行きました。お母さんが会計をしている間、ぼくはたいくつだったので、先に、商品をつめるつくえによりかかって、ボーっと立っていました。そしたら、野さいやお肉がたくさん入ったカゴをカートにのせた、しらないおばあちゃんが、ぼくのとなりにやってきました。カゴをつくえにおこうとしているとき、おばあちゃんは、

「重いのお。」

と、ひとりごとを言っていました。ぼくは、どうしようと、まわりを見ました。まわりの人は、商品をふくろに入れるのにむ中できがついていません。ぼくはまよったけどおもいきって、おばあちゃんのカゴをつかんで、ドンっと音を立てて、つくえの上においてあげました。そしたら、おばあちゃんが、

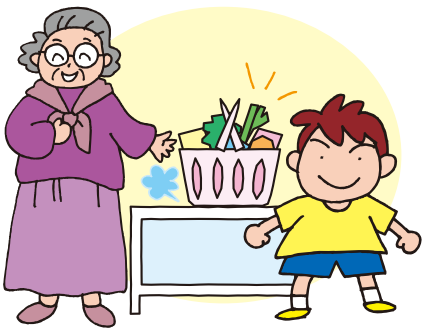
「ありがとう。」

と、言いました。そのときぼくは、ちょっといいことをして、くすぐったい気もちになりました。お母さんがお金をはらいおわって、ぼくのそばにきたので、そのことを話しました。

つぎの日、朝食を食べているときに、お父さんが、

「おまえ、えらいなあ。」

と言ってくれました。そしてまた、いい気分になりました。

国語じてんで、「ふくし」の言葉のいみを調べてみると、「多くの人のしあわせ」「こうふく」と書いてありました。おばあちゃんから「ありがとう。」と言われてうれしかったし、お母さんやお父さんからほめられた時もうれしかったです。おもちゃを買ってもらった時、おいしいものを食べた時、あそびにつれてもらった時とはちがういい気分でした。いい気分には、いろいろなしゅるいがあるんだなあと思いました。

ぼくはまだ子どもだけど、子どもでも人をたすけてあげれるし、いい気もちになれるから、これからも、気がついた時は自分からたすけてあげたいと思います。